

### 17) 超音波内視鏡（オリンパス社製ラジアルセクタ式4号機）の使用経験

五十嵐良典・加藤 俊幸（県立ガンセンター）  
齊藤 征史・丹羽 正之（新潟病院内科）  
小越 和栄

当院において、昭和60年4月より超音波内視鏡オリンパス4号機を内視鏡検査の一貫として導入した。約30例に施行し、以下の知見を得た。

本法は非侵襲性であり、食道、胃、膀胱等の検査が一度におこなえる。癌の浸達度診断や、粘膜下腫瘍の性状診断や隣接臓器からの影響等の診断に有効である。しかし、超音波内視鏡を密着させにくい部位や、バルーンの使用によって粘膜面の微細構造の抽出が難しい点も認められた。

超音波内視鏡の使用に熟練することによって、短時間でかなり有効な診断を行なえと考えられ、今後普及発展する検査法と考えられた。

## II. 特別講演

### 胃潰瘍治療の現況と展望

岡部 治弥 教授（北里大学医学部）

## 昭和60年度新潟精神医学会

日時 昭和60年11月2日（土）

午後1時～午後5時

会場 新潟東映ホテル

### I. 一般演題

#### 1) 妄想反応を呈した一卵性双生児不一致例

藤田 基・有田 忠司（新潟大学精神科）  
飯田 真

橋 玲子（同 保健管理センター）

妄想反応を呈した26才の男子一卵性双生児の不一致例を経験したので報告した。急性妄想状態を呈したのはふたごの兄（A）の方で、弟（B）も一過性に軽度の妄想反応様のエピソードを経過したことがある。

ふたごは、父が石工を営む兼業農家の末子として生まれた。Bに新生児仮死があったほか、出産に合併症はなかった。父親は循環気質であり、母親は敏感性格で過干渉の傾向があった。乳児期はAのほうが1カ月位発

達早くふたごのなかで優位になっていたが、幼児期には両親によって兄弟の役割づけがなされ、Aは常に弟であるBに譲らされ自分の要求が通されなかった。小中学校では、Aは女子の友達が多くまごなどを好んだが、Bは腕白に育った。二人とも普通高校卒業後に就職しているが、Aは卒業直前にBはその後相次いで軽度の妄想反応様のエピソードを経過している。その後もAは自己関係づけの傾向が続いたが、Bはより健康に適応している。A、Bとも共通して敏感性格であるが、Aが極端な対人的無力性を発展させているのに対してBは敏感性を代償するかのように対人的外向性を獲得している。両親との関係は、Aが母親との同一視が強いのにに対して、Bは両親に対する対向同一性を見いだしている。今回のAの急性妄想状態は、結婚、妻の出産、新築、目上の男性とのつきあいという、父親としての同一性が不十分であるAにとっては重い社会的負荷の下に発症した。

今回の症例は2人とも敏感性という、おそらくは遺伝的に強く規定された自己関係づけの傾向をもちながら、生育史の差によって対人パターンや統合力に大きな差を生じ、Bは他者とのコミュニケーションのなかで自己の誤信を修正できるが、Aはそれに度々失敗し妄想的確信にいたる。妄想性人格の発達史に関して遺伝因と生育史のかねあいについて考えるうえで興味深い症例であった。また、敏感関係妄想の発展を妄想の萌芽の段階とその発展に分けて考えると、Bは前者の要素のみをもち臨床的な妄想反応を呈するには至らないが、Aは後者をももち発症に至ったと考えられる。この意味で関係妄想を段階的にとらえる可能性が示唆された。

#### 2) 一過性の憑依状態と種々の神経症様症状を呈した双生児の不一致例

滝沢 謙二・古谷野淳子（新潟大学精神科）  
飯田 真

種々の精神障害の病因をさぐる上で、双生児研究は重要な方法の一つである。今回我々は一過性の憑依妄想とさまざまな神経症様症状を呈した一卵性双生児の不一致例を経験したので報告する。

症例はS41年生まれ、初診時19才の男性で双子の兄（A）がおり、症例（B）は第2子である。卵性診断により一卵性双生児と判定されている。

症例Bは、2才までは実父母と離れて祖母の下で養育されたが、発育も順調で、学校の成績も良く表面的には明るくいい子と思われていた。中3の時心因性の排尿

障害を初発し、S60年4月大学入学後まもなく離人症様症状、視覚異常感、奇妙な身体感覚出現し、6月より魔物にとりつかれたという憑依妄想に発展した。7月2日当科入院後は、予期不安、身体病恐怖、精神病恐怖、心気症状が訴えられた。8月上旬には死の予感にとりつかれ抑うつ的になった。8月20日退院としたが、心気症状、精神病恐怖が持続し、さらに視覚異常感、離人症様症状が再燃している。

症例は、心気、恐怖強迫、離人、不安などのいわゆる汎神経症症状を呈し、一過性の憑依妄想を有しているが、基本的には疾病恐怖が前景に立つ神経症レベルの病態と思われる。

さて不一致の理由をさぐる上で双子の性格分析を行なったが、BはAと比べ神経質傾向、几帳面さ、完全主義的傾向、強迫的傾向、心氣的傾向といった神経症的性格の病理が強く見られた。この性格の違いをきたした要因として2才までの母子分離が重要と考えられた。Bは自由な自我の発達ができず、神経症的性格の病理を発達させたものと思われた。

発症機転としては、他県への大学進学により不安定ながら依存関係にあった母との別離が重要と考えられた。

以上多彩な神経症様症状を呈した一卵性双生児の不一致例を報告し、症例の診断および双子の性格分析、発症機転について考察した。

### 3) 二人組精神病の一症例

稲井 徳栄・勝井 丈美 (河渡病院)  
和泉 貞次

60才の母親(M)と30才の娘(C)に生じた二人組精神病の一症例について報告した。

家族歴:(M)の母親に被害妄想的言辭がみられたことがあった。

現病歴:S49年建売り住宅を購入し、(M)が敷地内の草取りをしていたところ隣家の開業医Tに、「工事の時に俺の家の前を通さない」などと嫌味を言われ、近所付き合いに神経を使うようにしていた。S50年10月転居。その頃より結婚していた(C)が実家に戻り絶えず行動を共にするようになった。まもなく(M)が「敷地内に灯油をまかれた」「家のブロックがこわされた」「車庫をこわされた」「私を近所の人が刃物を持って襲う」などと言い始め、(C)も同調するようになった。警察へ通報したり、裁判に訴えたこともあった。最近(M)が、「近所の家に放火する」と言い始めたため、S60年5月24日二人共入院となった。

入院後の経過:精神療法、薬物療法(メジャートラシライザー)を併用した。行動を共にしていることが多く治療の必要性から別の病棟に分けようとしたところ、二人共自殺企図を試みた。自分達が後から引越してきたのだから頭を下げるべきだ、とは言うものの被害妄想については変化がみられなかった。

(M)がIQ63、(C)がIQ50であり、ロールシャッハテストでは(M)に興味対象の狭さ、観念活動の貧弱さが、(C)に精神活動の貧弱性、常同的思考、依存欲求・愛情欲求著明が認められた。

本症例は、知能の低い母と娘が極めて密着した生活を送っているうちに、被害妄想・好訴妄想を抱いた母親が娘を感化し、二人共同様な症状を呈した極めて貴重な症例であると考えられる。なお、母親については、“パルノイア”という病名が妥当と考えられる。

### 4) 複雑部分発作による遷延性意識障害をきたした、シンナー吸引歴をもつ一例

恩田 晃・笹川 陸男 (国立療養所 寺泊病院)  
梶 鎮夫

症例は16才の少年で、軽い感冒様症状があった以外は特に誘因なく、突然の意識減損を伴う偏向発作で発症した。発作は一日数回おこり、発作間欠期にも軽い意識障害が続いた。この状態が数日間続き、当院に入院。脳波では広汎に2~2.5Hz不規則徐波が連続してみられ、VTR-脳波同時記録にて発作が確認された。発作時には、広汎性2.5~3Hz高振幅徐波が律動性に連続していた。諸検査にて脳炎や代謝性疾患を疑わせる所見は認められず、薬物の影響も確認されなかった。頭部CTも正常であった。重患室にて経過観察し、PHT投与を行なった。入院第3日目には意識清明となり、発作も減少。脳波も徐々に改善がみられ、3週間後には9Hzの基礎律動が認められている。

シンナーは、13才から2年半にわたる週1回以上の吸引歴があるが、今回の発症とは直接の関係はないと思われる。

### 5) 晩発性精神分裂病を疑われた Klinefelter 症候群の一例

早川 東作 (東京大学分院神経科)  
浅香 昭雄 (同 保健学科)  
田宮 崇 (田宮病院)  
鈴木 正博 (日赤病院神経内科)

晩発性精神分裂病を疑われた Klinefelter 症候群の1例